

布引敏雄さんという学者の『長州藩維新団（解放出版社）』という冊子を二年ほど前拾い読みして、高須久子という女囚と被差別民の芸人勇吉のことが記憶に残っていたが、最近、映画『獄（ひとや）に咲く花』という作品があることを知り、DVDで観た。

映画は、野山獄に幽閉された吉田松陰と女囚高須久子（映画では久になっていた）が、互いに惹かれていく過程を描いていた。姦淫罪と思われていた久子の本当の罪状は、当時御法度となっていたにもかかわらず、被差別民を度々座敷に上げ、もてなしていた罪であったことを、久子は松陰に告白する。松陰生誕180年記念映画ということで、松陰が同房の受刑者に獄中教育（福堂策）を広めていくさまを明治維新の曙として描き、夫を失った寂しさから被差別民の芸を求めた行為の顛末が勇吉の処刑であったという久子の贖罪をも包み込んでいく、松陰の人間性を描こうとしたと思われる。ただ映画では、それ以上の探求はなく、布引さんの『長州藩維新団』の手助けが必要である。

ボクは、それでもわからなかった。久子は自分の行為の行く末は推測できたと言いながら、何故、度々勇吉をもてなしたのか、何故、死罪になる危険性を冒してまで勇吉はそれに応じたのか。それは、封建の末期という時代の



吉田松陰と高須久子と、芸人勇吉

なせる業だったのではないだろうか。なるほど、坂本龍馬は脱藩し事を成したが、武市半平太は事を急ぎ誅首された。薩摩藩は五代友厚らを首尾良く密出国させ、後の明治政府の礎を成したが、松陰は密出国に失敗し、野山獄送りという軽罪でしのいだが、ほどなくして安政の大獄に囚われた。維新の志士たちは、封建に対して勇敢だが、なんとも無防備で、楽観に過ぎる。時代も、ある時はおおらかで、ある時は陰惨だ。それは、志士たちの周りだけのことではなかったのだろう。庶民もまた、時に、御法度であるはずの被差別民との交流をなし、時に、これを抗争の具に使った。久子の身内もそうだったのではないか。勇吉もまた、時に封建に脅え、時にかすかな自由の足音に気を許したのではないか。

志士たちの維新は、数限りなく描かれ、善されているが、封建の末期の被差別民や民衆を描いたものは少ない。ボクは、封建の末期に生きた志士も民衆も、ある意味右往左往し、またある意味、用心深くいかに生きべきかを探ったことであろうと思いを巡らせ、その時代の部落問題をもっと知りたかった。ひょっとしたら、その時代の人々は、現代人よりはるかに、人権のリノリストだったのかもしれない。

（株）ナイス代表取締役 富田一幸



hidarimakiの
この逸編

何がジェーンに起ったか?



監督：ロバート・ロジャース
脚本：ルカス・ヘラー
キャスト：ベティー・デイビス
ジョン・クローフォード
製作：1962年米国
モノクロ133min
脚録：リチャード・ロジャース

小学生の頃、「お化け映画」を仲間うちでよく話題にした。化け猫、憲兵の幽霊、また四谷怪談や怪談累が淵（かさねがぶち）など正調怪談映画も製作されていた。中には「海女の戦慄」などというエロ猟奇なものまであり、怪奇猟奇はだいたい新東宝映画と相場が決まっていた。東宝・東映・松竹など5社の勃興により新東宝は凋落し、60年頃までにはこの手の映画は姿を消していくが、僕らは、まだ見もせぬお化け映画を講釈師みたように話した。とくに鍋島藩のお家騒動をテーマとした「怪談鍋島の猫」のように、惨殺された家臣の血をなめ猫の化身となって上司に憑依（ひょうい）する怪猫役は、入江たか子さん（「椿三十郎」〈61年〉で老家老の妻役として秀逸な演技）の得意技であった。彼女のメイクは、いわば歌舞伎十八番「暫（しばらく）」のように隈取（くまどり）され、口が裂けておどろおどろしく子ども心に本当に怖かった。

そこでベティー・デイビスという女優の

お話である。彼女の顔はメイクアップなしで、とくに眼がものすごく怖い。「何がジェーンに起ったか？」は勿論お化け映画ではない。しかしお化け映画以上に怖い。この映画以降に作られた同監督の「ふるえて眠れ」（65年）と同様、特別にメイクがないのにシーンごとに表情を変化させるベティーの顔はただただ恐ろしい。名作「イブの総て」（50年）ではジャンヌ・モローのような退廃的な美を持つ女優だったが、役の上とはいえこれはその後のベティーの姿だ。

忘れられないシーンがある。身体に障害を持つ姉が、ジェーンの作った料理の蓋を開けた瞬間、ネズミの死体を発見する。今も鮮烈に覚えていて、それを見たくて最近市販されたこの映画を発見し購入したがやはり震えてしまった。オカルト仕立てだが幽霊が出るわけでも、怪奇現象が起るわけでもない。もちろん血も飛び交わない。意味ありげな音響効果もなく、廊下の角を曲がってワッと驚かすような安易さもない。言ってみればヒチコックの「レベッカ」（40年）や「白い恐怖」（45年）のテーストに近い一級のサイコ・サスペンスといえる。

過去、華やかな芸能界で活躍した二人の姉妹が、郊外で近隣と断絶して住んでいる。姉のある事故をきっかけに妹が精神疾患を患い、妄想や狂気を生んでいく。亡くなった父親への偏愛、それに重なる姉妹間の確執、時には嫉妬や憎悪が繰り返し現れ、姉妹のドロドロの葛藤が果てしなく続く。

光と影の演出が人間の内奥の怖さを描き出し、恐怖映画の逸編となった。2大女優が汚れ役で競演しこの映画はこれがすべて。2人が何より怖い！

hidarimaki

